

## 「インドのエンジニア人材争奪戦の舞台裏その2」

田中 啓介

前回のインドのエンジニア人材争奪戦の舞台裏に引き続き、今回は日本で働くインド人ITエンジニアがどのような想いで日本へ行ったのか、そして、今後日本で働きたいインド人エンジニアをいかにして増やしていくかについての考察を述べたいと思います。

### ＜日本で働くインド人ITエンジニアの声＞

2018年10月IIT（インド工科大学）ハイデラバード校でのJETRO、経済産業省も主催に名を連ねた日系企業の合同就職説明会や、IIT 在校生に的を絞った日系企業へのインターンシップサービス（ウェブスタッフ社による日本語教育プログラム“PIITs”）、ここ数年で日系企業へインド人ハイススキル人材を紹介するサービス等が目立ち始め、少しずつではあるが日本でもようやくインド人材への注目が集まりつつあります。

インド人にとっては、一部の日本文化やサブカルチャーのファンを除けば、より高い給与を得るためのツールとして日本語を学んでいるインド人がほとんどで、インド人材が就労先として日本を選ぶ理由については、残念ながら、まだ高水準な給与であることが主な背景にあるケースが多いように感じられます。このような現状を考慮すると、日系企業にとってはIITのような超トップ級工科大学ではなく、中堅クラスの卒業生をターゲットにする方が日系企業との相性が良いように思われます。

地方の中堅クラス出身のインド人材であれば、英語もあまり流暢ではなく国際経験も乏しいからこそ日本語や日本の商習慣を習得することにあまり抵抗がないこと、そして、日本に行くことで自分が希望する給与水準を獲得できるなど、お互いにWin-Winの関係になりやすいと考えます。

### ＜日本で働きたいインド人エンジニアをいかにして増やすか＞

ここで、非英語圏であるドイツとフランスの取組について紹介したいと思います。日本にも拠点を持つ非営利団体「ゲーティンスティテュート（ドイツ）」、「アリアンスフランセーズ（フランス）」は、ドイツ語やフランス語を教える語学学校としてだけでなく、ハイスなカルチャーセンターとしてもインド国内で認識されています。例えば、ゲーティンスティテュートはインド全土に6か所あり、子供向けアート

イベント、映画祭、アート展、ジェンダースタディーに関するディスカッション等のイベントが英語で行われています。

これらの非営利団体が留学生の斡旋をしているわけではありませんが、ドイツに留学するインド人学生の人数は2017年のデータで約17,000人（大学以上）に対して、日本では約1,000人（高等専門学校以上）となっており、上述の取組がインド人に対するその国の具体的なイメージや知名度の向上に一役を買っているとされます。

あるインド人エンジニアの話によると、インドの工科系大学生は日本のアニメやゲームカルチャーなどのサブカルチャーとの親和性は比較的高く、オタク文化のファンも多いようです。

2018年末には、

「ANIME INDIA」という日本のアニメ情報を英語で紹介するサイトがインドでオープンしましたが、主催のArjun Arya氏も工学科卒のアニメファンだそうで、「インドで知名度の低いアニメ文化について教育(!)するため」に始めたと同氏のブログ記事に書いており、近年の日本語学習者の中でもアニメファンの割合は急増しているようです。また、新海誠監督の最新作『天気の子』は、2019年4月ごろオンライン上でインドでの公開を求める署名活動が起こり、約5万人のファンが賛同し署名をしたことから、その声が新海誠監督や東宝の海外配給担当、インドの配給会社の耳に届き実現することになり、ついに2019年10月11日からインド国内で公開されることになっています。

徐々に富裕層が増加しているインドにおいて、日本を代表する文化であるアニメが今後のインド人留学生やエンジニアにとって日本に関心を持つきっかけとしてのコンテンツになるのは間違いないのではないかと感じます。日本の就労環境や生活環境の改善、企業の意識改革、そして、オタク文化やサブカルチャーを通じた日印交流の促進等、やるべきことは多くその実現は決して簡単ではありませんが、私たちの未来はそう暗くはないと信じています。日本とインドが相思相愛の関係になることを祈って…。



「コスプレウォーク  
2019」の様子